

展示室
だより

「機関士の歌」
飯田恒治展

只今、「職業・生活の歌の作り手
―機関士の歌―飯田恒治」をテーマ
に、飯田恒治氏からご寄贈いただき
ました新資料の一部を展示していま
す。

飯田氏は、大正十四年に千葉県に
生まれ、国鉄の機関士として奉職す
る一方、昭和十九年に同郷で竹柏会
門人であった椿一郎に師事し、その
紹介で同二十一年に竹柏会入会。熱
海の信綱を訪問し、直接師事を仰ぎ
ました。

歌集『機関士の歌一、四』を刊行
(昭和二十四〜三十四年)し、飯田氏



中央が信綱胸像木彫。飯田氏の依頼によ
り、佐倉市の彫刻家・奥長信久氏が制作
(昭和63年5月)

は機関士としての仕事ぶりを積極的
に短歌に詠み、発表しました。信綱
は「鉄道人でなければ詠めぬ歌」と
飯田氏の歌風や歌集を讃えています。

また、飯田氏は平成五年に、職業
詠のほか信綱を追悼して詠んだ歌な
どを、『鉄道員の歌』としてまとめら
れました。

昨年六月、飯田氏から当館に『万
葉集輯影』(初出は『校本万葉集』
第一帙に収録)の所蔵を問い合わせ
る葉書が届きました。このことがきつ
かけとなり、飯田氏の第一歌集『機
関士の歌』の刊行を祝って信綱から
贈られた『万葉集輯影』を、ご寄贈
いただきました。以後、続けて飯田
氏の歌集や信綱胸像木彫等約二十点
の関係資料をご寄贈いただくこと
になりました。

さらに、本年一月には、飯田氏宛
の信綱書簡約百四十通や信綱自筆原
稿、関連書籍約十点を、二月には信
綱肖像画・賛(桜湖II椿宗太郎画・
信綱自筆)および信綱自筆短歌掛軸
三本と飯田氏自筆資料等五点を新た
にご寄贈いただきました。

昭和二十〜三十年代における晩年
の信綱と門人の飯田氏との交流を示
す貴重な資料であり、今後、整理を
行い、展示公開していきます。

信綱と中村晋也氏の
「心のふるさと鈴鹿」

佐佐木信綱記念館長
坂尾 富司

昨年九月十四日、信綱と同じ文化
勲章受章者で、鹿児島市在住の彫刻
家中村晋也氏が、佐佐木信綱記念
館を訪問された。信綱は昭和十二年
・第一回文化勲章受章者で、中村氏
は平成十九年の文化勲章受章者であ
る。



信綱受章の文化勲章をご覧になる中村氏

当館見学の中で中村氏は、「資料館
の展示、それに生家や文庫の保存も
素晴らしい。今後も信綱のふるさと
鈴鹿にあるこの記念館を、後世に伝

えていってほしい」とおっしゃられ
た。

中村氏は若かりし頃、亀山市から
旧制神戸中学(現神戸高校)へ自転
車で通学された。帰りには道草をし、
神戸城跡などに足を運ばれた。神戸
の町並みに、中村氏は「心のふるさ
とを感じる」と言われる。またそこ
には、「心を分かち合う学友がいる。
我が俺かで話しができる仲間がいる。
これがうれしい」とも、よくおっし
やる。

平成二十二年十二月一日の市制記
念日に、中村氏は「心のふるさと」
と想う鈴鹿市へ、代表作「春に奏で
る」の像を寄贈された。像は、市役
所一階市民ロビーの中心に設置され
ている。

信綱がふるさとを想い、還暦を記
念して石薬師文庫を贈ったように、
中村氏も同じ気持ちで「心のふるさ
と」に像を贈られたのであろう。

休館日・開館時間変更
のお知らせ

4月1日から、下記のとおり
変更になります。

休館日

月曜・第3火曜日

ただし、休日の場合は翌日
年末年始(12/28~1/4)

開館時間

午前9時~午後4時30分

「伊勢名所和歌集」題辞考

北川 英昭

『伊勢名所和歌集上・下』は松田久
秋編集・佐々木弘綱校閲による歌集
である。伊勢の地名を詠みこんだ和
歌を全国から募集して成った木版和
綴じの和歌集二冊で、奥付には著作
者は河芸郡玉垣村の松田重兵衛(久
秋)、発行兼印刷者は四日市町南町
の伊藤善太郎、発行は明治二十九
年五月とある。

鈴鹿市玉垣地区郷土史研究会長の
川出和彦氏から、この和歌集の題辞
の筆者、鳥尾小弥太と弘綱との関係
を問われた。題辞筆者との関係を、
編集者松田久秋よりも、校閲者の弘
綱とのつながりに着目されているよ
うであった。弘綱の日記『弘綱年譜』
には鳥尾小弥太の記事はないことか
ら、半ばあきらめていたところ、昨
秋「泗楽十八号」に「原田二郎の竹
柏園」なる小論を書く折に、「原田二
郎日誌」(原田積善会所蔵)の中に「鳥
尾中将」の記事を発見した。以下に
鳥尾の題辞が採用された経緯を推論
もふくめて記したい。

『弘綱年譜』で久秋と名所和歌集の
記述をみるに、明治七年三月、入門



第二十六号

発行・編集
鈴鹿市文化課
佐佐木信綱記念館
鈴鹿市石薬師町
1707-3
TEL・FAX
059-374-3140

目次

寄稿「伊勢名所和歌集」題辞考 北川英昭……………1
記念館ニュース「登録有形文化財に登録 ほか」……………2、3
「新資料の紹介」 信綱一首(二十六)……………2、3
展示室だより……………4
「飯田恒治展」 磯上知里……………4
信綱と中村晋也氏の
「心のふるさと鈴鹿」……………4

した松田芳松・久秋の兄弟は石薬師
の弘綱宅に寄留している。その後弘
綱の転居した東京宅を明治十八年五
月二十日から六月二日までの間に、
久秋は何回か訪ねている。この時、
歌集出版の企画を相談し同意を得た
のであろう。その後、明治十九年九
月十九日久秋が伊勢新聞に詠歌募集
の広告を久秋、弘綱、千稲、頭允、
小軒らの名で出す。集まった歌稿は
久秋が選歌して弘綱の許へ届けられ
る。



温故知今(古きをたずねて今を知る)得庵居士題
(鳥尾小弥太題辞「伊勢名所和歌集」)

明治二十年七月から、門人中西・
斎藤範世の手伝いで整理、九月十八
日から補正、十一月に完了。「十一
月十六日 伊勢名所清書にかゝる、明
治二十一年二月廿八日 伊勢名所春
部書き終る」とある。春部の三三一
首の歌を三カ月かかって弘綱が清書。
清書がそのまま版下となるのである。

このペースでは清書を終えるまでに
一年余はかかることになる。
弘綱が題辞の筆者を思案していた
ときに、鳥尾小弥太を推薦したのが
原田二郎であると思われる。原田二
郎は弘綱の門人で、弘綱宅の隠居所
を明治二十年から七年間寓居にし
ていた。原田は松阪出身の青年実業家
で元第七十四銀行頭取で、後に原田
積善会を興し社会福祉事業に尽くす
ことになる。その頃、原田は総武鉄
道の創設や海軍御用の会社の仕事に
奔走していた。

当時の鳥尾小弥太は陸軍中将、子
爵、枢密顧問官だ。のち貴族院議員、
勲一等旭日大綬章を受ける軍人・政
治家で文筆家としても高名だった。
人生意気に感ずる点は原田に通じる。
歌集の題辞の筆者として遜色はない。
号を得庵居士とも云い、熱海に別宅
があった。

鳥尾と原田との仲介者は、明治の
元勲井上馨であろう。鳥尾も井上も
長州奇兵隊の出身で、鳥尾が八年後
輩である。井上と原田とは、ともに大
蔵省の時代から昵懇の間柄であった。
『原田二郎日誌』を見ると、「明治
二十一年三月十四日 七時東京(弘
綱宅内の寓居) 発、熱海富士屋に逗
留。十六日 弘綱へ投書。十八日

弘綱から來書。弘綱へ返事出す。十
九日 加藤 寺田 上藤同行 鳥尾
中将を訪、夫より伊豆山(温泉)相
模屋に至り午飯 鳥尾來る対酌 夜
柴山を訪 佐々木へ投書明日出発の
事。二十日 午前熱海出発午後寓居
着」とある。

弘綱が夏部の清書にかかる頃、弘
綱は原田と親しく伊勢名所和歌集の
ことを談じ合い、題辞の人選につい
ても話していたかもしれない。同集
に原田の歌は嘉朝の号で四首入集し
ている。

折しも、原田は仕事上のことで鳥
尾中将と熱海で面会をした。事前に
原田と弘綱との熱海東京間の書状往
復があり、鳥尾別宅と相模屋で二度
の原田鳥尾の会談が持たれた。この
機会に原田は、話し熱心に和歌集の
題辞を懇請し、諒承を取り付けたと
思われる。満足できる報告を、帰京
後に弘綱にしたであろう。かくして
弘綱とはあまり知己でなかった鳥尾
小弥太の題辞が『伊勢名所和歌集』
の巻頭を飾ることとなった、と思っ
たのである。

明治二十四年の弘綱の死から五年
を経て『伊勢名所和歌集』は上梓さ
れたのであった。
(佐佐木信綱顕彰会会員)

記念館 ニュース

登録有形文化財 (建造物) に登録

昨年十月二十八日、信綱生家・土蔵・石薬師文庫が国の登録有形文化財(建造物)に登録されました。



登録有形文化財銘板
文化財(建造物)は、文化財保護法によって保存及び活用の措置が特に必要と

される建造物、かつ文部科学大臣が文化財登録原簿に登録した建造物のことをいいます。

住宅・事務所・社寺・橋・水門・トンネル・煙突など幅広く、多くの建造物が対象となります。その中でも、建設後五十年を経過した建造物で、「一 国土の歴史的景観に寄与しているもの」、「二 造形の規範となっているもの」、「三 再現することが容易でないもの」のいずれかであれば、登録有形文化財に該当します。登録制度の特徴は、建造物の活用

を重んずることにあります。建造物の大幅な外観変更や移築の場合などに現状変更の届出が必要ですが、建造物を拠点にした事業展開や地域活性化のために積極的に活用することが出来ます。身近な文化財建造物として守り、活かしていくことが、「文化を生かす」ことにつながっていきます。

今回の登録を受け、今後も地域に根づく信綱ゆかりの建造物として親しみをもっていただけるよう、保存と活用を図ってまいります。

平成二十三年年度 特別展報告

十一月二日(水)〜十二月十八日(日)まで、特別展「信綱と『言の葉の道』」―誕生から『日本歌学全書』刊行前後―を開催しました。

今回の特別展では、信綱誕生時に父弘綱が詠んだ『言の葉の道』つたへ



特別展図録

むとはかなくもわが命さへ祈らるゝかな』の一首にちなみ、弘綱・信綱親子の歩んできた『言の葉の道』について取り上げました。

待望の跡継ぎ信綱を授かったのは明治五年、弘綱四十五歳の時でした。弘綱は年老いたことを嘆きつつも、佐々木家の家学や自国の伝統ある歌・学問の修得、すなわち『言の葉の道』を伝えるという固い意志のもと、幼少時から信綱に徹底した英才教育をしました。

英才教育のもとで信綱は歌の才能を開花させ、上京が転機となって、明治十七年に十三歳で東京大学古典講習科に入学し、練成期を過ごしました。

信綱にとって『言の葉の道』の第一歩といえるのが、親子編著の『日本歌学全書』刊行(明治二十三〜二十四年)です。弘綱は惜しくも八編の校正中に他界し、九編の『万葉集』以降、信綱が本文の校正作業とともに標註(欄外の注釈)を行い、全十二冊を完成させました。

よって、弘綱の英才教育ぶりがかがえる信綱六〜十歳までの自筆短冊や東京大学古典講習科の信綱恩師ら寄書、『日本歌学全書』および



衣斐氏講演の様

講演会

十一月十二日(土)午後一時半から、鈴鹿市・佐佐木信綱顕彰会主催の講演会が開催されました。

「三条実美自筆題字」(一編巻頭収録)等を展示し、信綱誕生時から『日本歌学全書』刊行前後における弘綱・信綱親子の『言の葉の道』を紹介しました。

また、昨年は弘綱没後百二十年、『日本歌学全書』刊行開始から百二十年でもあり、親子の強い絆や国文学者として大成した信綱のバックボーンをあらためて知る機会となりました。

なお詳細については、特別展図録をご覧ください。幸いです。

新資料の紹介

当館学芸員による特別展の解説と、郷土史家の衣斐賢議氏から「信綱かるた」の原風景の演題でご講演をいただきました。

「信綱かるた」は、信綱の短歌の中から五十首を選んで「かるた」にしたもので、佐佐木信綱顕彰会が平成十六年に作成しました。

当館の施設概要等が鈴鹿市ホームページで紹介されています。下記アドレスにアクセスしてみてください。

鈴鹿市ホームページ内
文化施設/佐佐木信綱記念館
http://www.city.suzuka.lg.jp/life/shisetsu/9207.html



末松市長(左)と小林氏(右)

本年一月十日、信綱関係資料をご寄贈いただきました小林英俊氏に、末松則子市長から感謝状が贈呈されました。

小林氏は、祖父の福岡法重のりしげに宛てられた信綱書簡四十通や信綱肖像写

真(複製)・文書類約三十点の貴重な資料をご寄贈されました。

福岡法重(明治三十二〜平成九年)は、現鈴鹿市高岡町にある大福田寺住職の法道和尚(七世)の長男として生まれ、四日市高校長をはじめ、亀山高校長、亀山市教育長等を歴任しました。

昭和二十三年五月、福岡法重は四日市高校長に就任(昭和二十七年三月まで)同年九月、福岡校長は職員会議で校歌を作ることを提案し、熱海の信綱を訪ねて作詞を依頼しました。このことをきっかけに、信綱と福岡校長は交流を結ぶようになりました。

昭和二十四年四月に信綱の作詞が完成し、その後、弘田龍太郎の作曲も成り、同年十一月に四日市高校校歌が発表披露されました。

翌二十五年十月二十六日、信綱は最後のふるさと訪問の際に、四日市高校を訪れ、生徒たちの前で講演しました。

四日市高校訪問に先立って福岡校長は、信綱のふるさと訪問に寄り添っています。信綱は「福岡法重君に導かれて鞠が野にいたる」と詞書し、「まりが野に遊びし童今し斯く翁さびて来つ野の草は知るや」の一首を詠みました。この一首を含む約七十首を、信綱は最後のふるさと訪問の記念とし、「鈴鹿行」と題して発表しました。

また、信綱は昭和二十三〜三十一年にかけて、『佐佐木信綱全集』全十卷(二〜七卷「評釈万葉集」、八卷「佐佐木信綱文集」、九卷「佐佐木信綱歌集」、十卷「日本歌学史」)の刊行に心血を注ぎました。戦後の困難な出版・配本状況の中、福岡校長は三重県下における『佐佐木信綱全集』の配布や普及に尽力したことも、新資料によってわかってきました。

今後、資料の整理や調査を行い、展示公開してまいります。

信綱一首26

なげくなかれ悲しむなかれ日輪は 人間の上を照らしたまへり

『鶯』所収、昭和六年刊

嘆いてはいけない、悲しんではいけない。お天道様は人間の上を照らしてお守りくださっている。

「信綱かるた」より

ももとは、信綱が「児(病気の息子治綱)」と題して詠んだ一首